

時風景也。

川又の夫人は諸橋の姪でもあった。空襲警報のなか、棺も間に合わせのもので代用せざるを得なかった。

空襲による原版焼失

昭和二十年（一九四五）二月二十五日、この日のB29による東京空襲は、特に大修館書店の社屋および附設整版工場のあった神田区（現在の千代田区の一部）に甚大な被害を与え、神田区内だけでも約一万户の家屋が焼失、朝からの大雪で消火活動もままならなかった。淀橋区（現在の新宿区）大久保の自宅防空壕に避難していた川上市郎は、空襲警報が解除された翌二十六日は朝から自宅周辺の除雪作業をしていた。まさか神田が火災に遭っているとは思ってもいなかった川上は、近所の人が神田が焼かれたと話しているのを聞くと、急ぎ会社のある神田錦町に駆けつけた。駿河台下からずらん通りに入って会社の方角をみると、あるべきはずの大修館書店の建物がなかった。駆け足でようやく現地に辿り着いた川上に鈴木が投げかけた第一声は、「遅いぞ！」だった。鈴木は、唯一焼け残った鉄筋コンクリートの倉庫に必死に水を掛けて余熱を冷ましていたが、その手を休めることなく、「これでサッパリした。自分の思うように大漢和が出版できなければ、むしろ焼けてしまった方がいい」と川上に言った。しかし、その言葉とは裏腹に鈴木表情は複雑だった。名目上とはいえ、企業整備のために研究社との合併が行われたことで、「巻二」は研究社の名前で発行することになっていた。これまで資力と体力ををそいできた鈴木にとっては当然

のことながら耐えられないことであった。この空襲によって、印刷途上にあった「巻二」の資材はもちろん、鉛の地金約百トンの組置き基板の一切が焦土と化した。巨大な鉛の塊は一週間にわたって燃え続け、昼間は白く見えた灰色の山が、夜になると溶鉱炉のようにとろとろと赤い火を放った。

約半年後の八月十五日、太平洋戦争は終結する。

校正刷の分散保存

昭和二十年（一九四五）二月二十六日の朝、諸橋は鈴木から、前日の空襲で事業所も工場も全焼、大漢和辞典の活字もすべて鉛の塊と化してしまったという内容の電話を受けた。「巻二」校了目前のことであった。度々の東京空襲で、このような事態に至るであろうと覚悟はしていたものの、「二十余年の血肉を一朝の劫火に滅せられし」（『止軒日曆』）ことの無念さがいや増すばかりだった。

三月九日、鈴木は二十五日の空襲での被害状況を報告するために諸橋のもとを訪れた。それによると、「巻一」の紙型は鉄筋コンクリート製の土蔵の中に置いたので、まだ開けていないが大丈夫であろうとのこと。「巻二」は、六〇〇ページまで紙型にとって研究社に保管してあり無事。ただ、やっとの思いで配給を受けた「巻五」までの各巻一万部分の印刷用紙は、工場で保管していたためにすべて焼失してしまったということであった。しかし、組置きしていた原版がすべて百トンの鉛塊になった今となつては、再開されたとしても活字を新たにつくるところから始めなければならない。事業継続が危ぶまれた。大修館書店のみ



製本された校正刷

ならず、出版界は、「紙もなく応召で人もおらず、さらに空襲被害で焼失出版社が続出」（鈴木敏夫『出版』）、出版どころではない状況であった。

三月十一日、戦火を逃れるために、諸橋は東京文理科大学の学生に手伝ってもらって遠人村舎（西落合の諸橋邸内別棟）にあった『大漢和辞典』の最終校正本五十八冊（既刊の「巻一」を除く一万五〇〇ページを五十八冊に分けて綴じたもの）を北多摩郡砧村（現在の世田谷区岡本）の静嘉堂文庫に運び込んだ。その校正刷は修正赤字の集約されたもので、戦後になって事業が再開されたときの基本原稿となった。

校正刷は三セットあり、一セット（五十八冊）は諸橋の自宅に留め置き、もう一セットは岩崎小彌太（三菱第四代社長）の好意で、現在の山梨県都留市にあった宝鉦山の倉庫に運び込まれた^①。宝鉦山は、明治二十三年から採掘が始まり昭和四十五年閉山、三菱の所有となったのは明治三十六年からである。

ところで平成二十九年（二〇一七）の七月、「毎日新聞」山梨県版に「大漢和辞典、ゲラ刷り山梨・都留に疎開 地元図書館が報告」という見出しで次のような記事が載った。

山梨県都留市の戦後七二年企画「市民の記憶を語り伝える会」（同市教委主催）が三十日、同市中央三の「市まちづくり交流センター」であり、都留文科大学初代学長の漢学者、諸橋轍次博士（二八八三―一九八二年）の「大漢和辞典」（大修館書店）のゲラ刷りが戦火を逃れ、旧宝村（現都留市）にあった宝鉦山（戦後、三菱金属鉦業宝鉦山に改称）に疎開していた経過が報告された。戦中戦後の三十数年の歲月と延べ二五万八〇〇〇人の人員を費やして完成されたといわれる世界的大著に、三菱の鉦山を通して都留市が深く関わっていた事実が分かった。（「毎日新聞」二〇一七・七・三十一）

都留市立図書館では、「諸橋博士と山梨県への『本の疎開事業』を伝えていきたい。」としている。

幸いに焼失を免れた校正刷については分散保存の措置をとったものの、果たして編纂事業は継続できるのか否か、諸橋の気持ちは複雑だった。大修館書店からの出版が不可能になったときを考え、静嘉堂から出版できないかどうか、三菱の岩崎小彌太にも相談していた。一方で、自分の仕事はこれまでだ、と考えるとすべてが虚しくなった。諸橋が、資料カードを燃やしたり遠人村舎にあった書籍を皆に分け与えたりしたのはこのころである。